

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）（一般）

研究期間：2008～2010

課題番号：20320023

研究課題名（和文）国家もしくは都市の顕彰装置としての自画像コレクションの歴史文化史的  
研究研究課題名（英文）A historical and cultural study of collections of self-portraits as instruments of  
promotion for a state or a city

研究代表者：

小佐野 重利（OSANO SHIGETOSHI）

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：70177210

研究成果の概要（和文）：

本研究は、ウフィツィ美術館との共同研究として、同美術館に所蔵される 1700 点余の自画像大コレクションに関して、その形成からはじまり、約 350 年に及ぶコレクションの歴史を、その展開の節目となる時期の文化状況という共時的なコンテキストや、通時的な歴史コンテキストを検証し直しながら、トスカナ大公国という一国家、ひいては芸術都市フィレンツェの顕彰装置として同自画像コレクションがいかに機能したか、今なお機能しているのかを作品および資料の調査を通して、歴史文化史的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

The research project was rooted in a scholarly project I had jointly pursued over the past several years with Antonio Natali, the director of the Uffizi Gallery, and Giovanna Giusti, the Gallery's director of the Department of Nineteenth-Century and Contemporary Art. Our research attempted to trace the 300-year-plus history of the collection, encompassing not only the cultural context relating to important stages in its development but also its chronology. Through close examination of art works and related documentation, the project also demonstrated how the collection functioned historically as a propagandistic tool for the Grand Duchy of Tuscany as well as for an artistic city such as Florence.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2009年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2010年度	3,100,000	930,000	4,030,000
総計	10,600,000	3,180,000	13,780,000

研究分野：西洋美術史

科研費の分科・細目：哲学・美学美術史

キーワード：美術史、自画像、ウフィツィ美術館、ヴァザーリの回廊

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 1664年に、トスカナ大公メディチ家のコジモ二世の末子レオポルド（1617-75）

は、各地にいた彼の有能な代理人たちを介して活躍中の画家たちへ直接発注したり、個人が所蔵する画家の自画像を買い求めた

りすることで、自画像の個人的な収集を開始した。これが、ほぼ350年の歴史を誇るとともに、今日1700点余という世界に類例のない大コレクションにまで発展を遂げたウフィツィ美術館自画像コレクションの始まりである。その4分の1ほどがウフィツィ宮殿とアルノ河の対岸のピッティ宮殿とを宮中通路で繋ぐ「ヴァザーリの回廊」に掛けられ、残りの4分の3は、同美術館の収蔵庫に収められている。

(2) 一般公開されていない上、研究者もその全容を実見・把握するには特別の研究許可を必要とした。

## 2. 研究の目的

(1) ウフィツィ美術館アントニオ・ナターリ館長およびジョヴァンナ・ジュスティ担当部長の学術研究への理解と協力による共同研究として、同美術館に所蔵される1700点余の自画像コレクションに関して、その形成からはじまり、約350年に及ぶコレクションの歴史を、その展開の節目となる時期の文化状況という共時的なコンテキストや通時的な歴史コンテキストを検証し直しながら、トスカナ大公国という国家、ひいては芸術都市フィレンツェの顕彰装置として同自画像コレクションがいかに機能したか、今なお機能しているのか否かをコレクション作品の現地調査を通して、歴史文化史的に明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 自画像コレクションに関しては、1980年以降の収蔵作品に関する書類が目録化されずにいたため、これを日伊両言語で目録化する作業は、われわれ日本側だけでなくウフィツィ側にも裨益するところが大きい。まずそうした一次資料調査と並行して、共同研究者全員がフィレンツェの現場で調査できる

期間は限られているので、研究課題を効率よく実施するためには、自画像コレクションの歴史文化的な展開を辿る上で重要な作品を1700点余の作品からピックアップした。2008年夏はこれらの作業に費やし、帰国して研究を続行するために必要文献を渉猟し作品の写真を注文した。

(2) 2009年夏には、当初から企画されていた日本での展覧会開催の目途がほぼ立っていたこともあり、ウフィツィ美術館側との出品作品の最終調整、展覧会の学術組織および展示構成など詳細にわたる打ち合わせをし、出品予定の作品に関する一次資料の収集・筆写・翻訳作業に取り掛かった。2010年9月11日には特別展「ウフィツィ美術館自画像コレクション—巨匠たちの「秘めた素顔」1664-2010」の開催にこぎつけた。

## 4. 研究成果

(1) 年次計画で進化した研究途上での成果報告は、毎年、一次資料の筆写・翻訳にはじまり、研究論文として研究代表者および研究分担者、連携研究者が執筆刊行した（以下、5.を参照）。

(2) 特別展「ウフィツィ美術館自画像コレクション—巨匠たちの「秘めた素顔」1664-2010」のカタログは本研究に従事した研究者全員が中心になり執筆し、未刊行の一次資料の多くを公刊し、その内容すべてをイタリア語翻訳した別冊イタリア語カタログ（ただし非売品）も併せて刊行した。展覧会自体は、科学研究費補助金による研究成果の公開であることはもとより、ウフィツィ自画像コレクションの全容を限られた厳選作品で日本に紹介する最初にして、恐らく最後の機会となるため、カタログを充実させることに殊に意を注いだ。この公開は、ウフィツィ美術館が「昔日の巨匠たちの名品を集めた美術館」だけにとどまらず、このコレクション

によって今も全世界の美術活動に目配せを怠ることなく、イタリア国家、いやフィレンツェ市の芸術施設として世界の芸術文化の振興に寄与していることを示せたことにもっとも意義がある。展覧会は日本のほとんどの大手新聞やイタリアの新聞、雑誌『芸術新潮』などで取り上げられ、学術的に高い評価を得た。

展覧会の開催を機に、日本人3作家の新作自画像がウフィツィ美術館に寄贈され、一緒に展示されたことは極めて意味深い。それは、1981年のウフィツィ美術館創設四百周年記念自画像寄贈キャンペーンに従事したときに果たせなかったウフィツィ美術館ナターリ館長の夢の実現にとどまらない。

2010年9月8日の駐日イタリア大使館での寄贈式典で、同館長とともに寄贈を受けた歴史・美術・民族人類学遺産およびフィレンツェ市美術館連合監督長クリスティーナ・アチディーニは、「レオポルド枢機卿の小さなヨーロッパから眼差しは全世界へと広がった。本日、草間彌生、杉本博司、および横尾忠則の三氏の手になる日本の自画像三点が加わったことは、自画像収集の歴史とウフィツィ美術館の歴史において転換点となる特別の出来事である」とスピーチを結んだ。展覧会のサブタイトルにある「2010」は、この3点の寄贈が実現したからこそ、はじめて意味をもつ。

(3) 図書館寄贈用に(2)のカタログ(日本語・イタリア語)を編集し直し、それに「はしがき」を加えたCD-ROM(pdfファイル)を製作した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計12件)

①小佐野重利, 「国家もしくは都市の顕彰装置としての自画像コレクションの歴史文

化的研究」, 『美術史論叢』, 査読無, No. 25, 2009, pp. 158-146

②田中正之, 「ウフィツィ美術館における現代作家の自画像コレクションの拡充とその意義」, 『美術史論叢』, 査読無, No. 25, 2009, pp. 144-138

③浦一章, 「1980年代以降におけるウフィツィ美術館自画像コレクションの拡張—取得作品に関する資料紹介—」, 『美術史論叢』, 査読無, No. 25, 2009, pp. 136-81

④小佐野重利, 「アントニオ・パッツィ自画像コレクションの実態—ウフィツィ美術館自画像コレクション形成史との関係で—」, 『美術史論叢』, 査読無, No. 26, 2010, pp. 184-153

⑤浦一章(ほか協力者7人), 「ウフィツィ美術館自画像コレクション関連の資料から」, 『美術史論叢』, 査読無, No. 26, 2010, pp. 152-104

⑥秋山 聡, 「ヨーハン・ケーニヒ作『蠅のとまる紙片を持つデューラー』をめぐって」, 『美術史論叢』, 査読無, No. 26, 2010, pp. 102-83

⑦小佐野重利, 「国家もしくは都市の顕彰装置としての自画像コレクションの歴史文化的研究—学術調査研究から展覧会に至るまで—」, 『国立国際美術館ニュース』, 査読無, 181(2010.12), 2010, pp. 2-3

⑧小佐野重利, 「ウフィツィ美術館自画像コレクション展開記念と平成20—22年度科学研究費補助金・基盤研究(B)の研究成果一部公開を兼ねた日伊講演会の報告」, 『美術史論叢』, 査読無, No. 27, 2011, pp. 134-131

⑨小佐野重利, 「ウフィツィ美術館自画像コレクションの毀誉褒貶—2、3の考察」, 『美術史論叢』, 査読無, No. 27, 2011, pp. 130-113

⑩田中正之, 「ポストモダン時代の自己表象」, 『美術史論叢』, 査読無, No. 27, 2011, pp. 112-78

⑪ Shigetoshi Osano, “Testimone di un doppio sogno” negli *Uffizi. Studi e Ricerche, I Pieghevoli 45*, , 査読無, S. Pier Scheraggio, 21 marzo 2011

⑫ Shigetoshi Osano, “The Exhibition of Self-Portraits from the Uffizi Gallery in Japan in 2010-11 and the Donation of Three Japanese Artists’ Self-Portraits”, in *Bollettino degli Uffizi 2010*, 査読無, (in press)

[学会発表] (計2件)

① 2010年9月11日、日伊講演会: 「I veri volti dei maestri 巨匠たちの素顔 — ウフィツィ美術館自画像コレクション展開催を記念して —」(イタリア語・日本語使用、同時通訳付)、イタリア文化会館 アニェッリ・ホール (アントニオ・ナターリ、小佐野重利、ジョヴァンナ・ジュステイ、田中正之の研究発表およびディスカッション)

② 2010年12月11日、シンポジウム「自画像の美術史 ルネサンスから現代まで」、国立国際美術館講堂 (パネリストとして小佐野重利がプレゼンテーションを行ない討論に加わる)

[図書] (計2件)

① 小佐野重利、田中正之 責任編集, 『ウフィツィ美術館自画像コレクション—巨匠たちの「秘めた素顔」1664-2010』, 257pp., 朝日新聞社, 2010

② Shigetoshi Osano et Kazuaki Ura (a cura di), *Autoritratti dalla Collezione della Galleria degli Uffizi*, 90p., The Asahi Shimbun, 2010

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小佐野重利 (OSANO SHIGETOSHI)

東京大学大学院人文社会系研究科教授

研究者番号 70177210

### (2) 研究分担者

秋山 聡 (AKIYAMA AKIRA)

東京大学大学院人文社会系研究科教授

研究者番号 50293113

浦 一章 (URA KAZUAKI)

東京大学大学院人文社会系研究科教授

研究者番号 90203596

### (3) 連携研究者

田中正之 (TANAKA MASAYUKI)

武蔵野美術大学造形学部教授

研究者番号 70290872